■大会概況

第79回日本プロゴルフ選手権大会　日清カップヌードル杯

復興とファンサービスを第一に考えた話題のメジャー大会！

男子の国内メジャー緒戦となる日本プロゴルフ選手権大会　日清カップヌードル杯。今年で79回と日本オープンを上回る国内最古の大会は開場40周年を迎えた小野東洋GCで開催された。

これまで日本プロ、日本オープンなど男女のメジャーの舞台を数多く作り上げた名匠・上田治設計。コースは、打ち上げ、打ちおろし、左右ドッグレッグを丘陵地に配し随所に巨木が張り出しスタイミーになるなどタフなホールが連続、選手の技術と戦略性に注目が集まった。日本プロの兵庫開催は18年ぶり。

今回話題となったのはパー4としては大会史上2番目に長い517ヤードの15番。いつもはパー5で使うホールを、パー4とした。さらに18番も467ヤードのパー4の打ち上げと世界メジャー規模のタフなセッティングとなった。

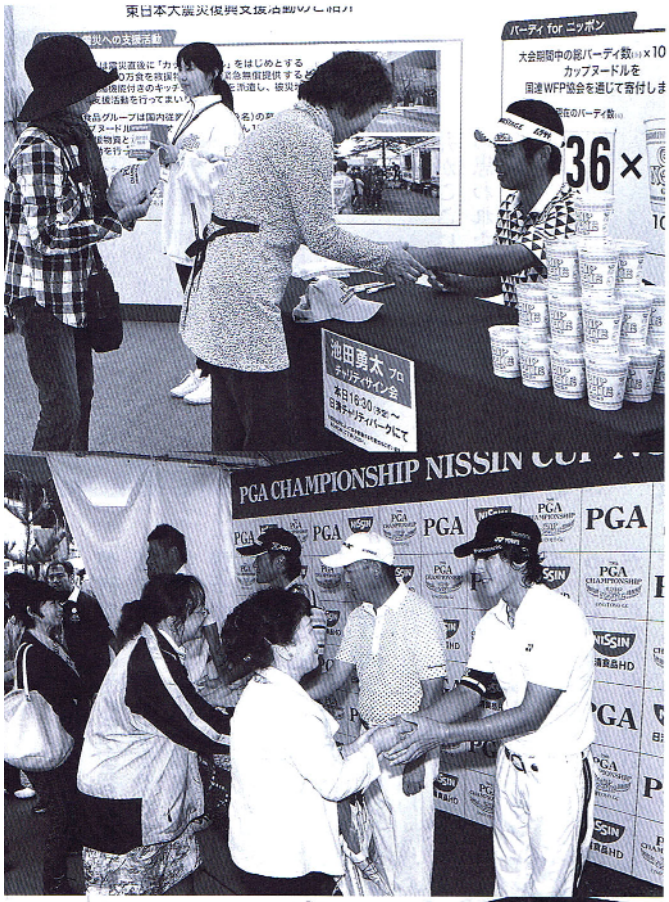
注目の2ホールはホール別難易度の1、2位を占めた。

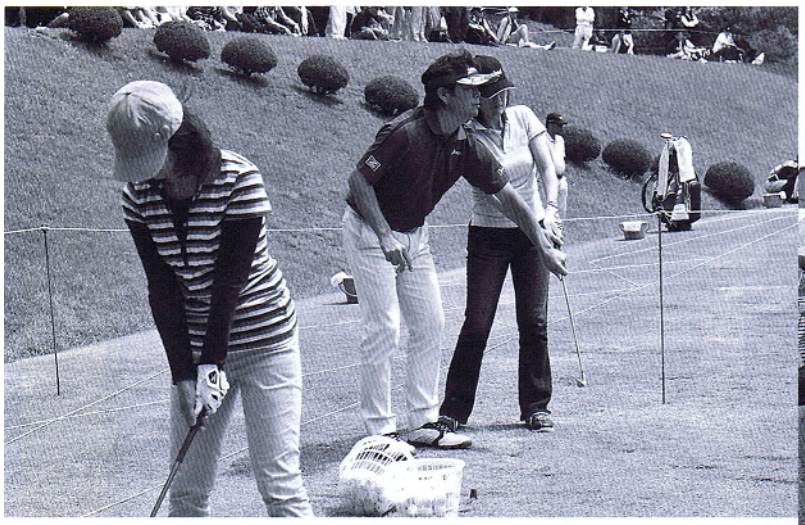
15番は4日間の平均ストロークが4・573と難易度の1位。バーディーは4日間でわずか9個が記録されたにとどまり逆にボギーは166、ダブルボギー34、トリプルボギーは5個もあった。

18番は平均ストローク4・458の難易度2位でバーディーは15個だった。タフな上がりホールに選手もギャラリーも手に汗を握った。アンダーパーで回った選手はわずか6人。優勝した河井の9アンダー、2位に2打差がいかに優れた内容だったか、また好ゲームの〝演出〟が功を奏した大会としても長く語り継がれる大会となった。

東日本大震災を受けて大会開催も危惧されたが、復興に向けたチャリティや元気を送るイベントをふんだんに盛り込んだ思いやり大会となった。大会前日の指定練習日は無料開放、サイン、写真オーケーのファン感謝デーはあいにくの雨が水を差し、思うような出会いが寸断されたが、選手たちが協力してチャリティ握手会を行った。

石川、池田らトッププロの待つ





桑田泉ティーチングプロのレッスンも好評を博した

テントには長蛇の列ができ、「今日はありがとうございます」「がんばってください」の声が行き交った。

「こういうときにわざわざコースまで足を運んでくれたファンにぼくらができることをしっかりしなくては」石川は次々と差し出される手を握り笑顔で交流した。

日清食品の所属、ホストプロ池田は第3日目の土曜日のホールアウト後にも、チャリティサイン会を急きょ開くなど、復興とファンサービスを第一に大会中、大忙しだった。

また、2010年のPGAティーチングプロアワード最優秀賞受賞の桑田泉のレッスン会は、ティーチング活動を大きな柱に置くPGAの大事なイベントだった。

選手が練習するレンジの3打席を使って行われたレッスン会には、ギャラリーだけでなく取材のプレスも参加し、ティーチングプロの最大のイベントで今年度最優秀賞を獲得したクォーター理論をみんなで体験した。

桑田プロはプロ野球元巨人の桑田真澄投手（現評論家）の弟。知名度も加わり土曜日の午後の練習場はいつにない交流の輪が広がった。

●競技レポート

2日目首位に立った河井博大が逃切り初優勝！

日本最古のプロゴルフトーナメント、第79回日本プロゴルフ選手権大会　日清カップヌードル杯は5月12日から4日間、兵庫県小野市の小野東洋ゴルフ倶楽部（7千158ヤード、パー71）で144人が出場して行われ、プロ16年目の河井博大が9アンダー、275ストロークで優勝した。

河井は第1日37位と出遅れながら第2日ベストスコア67をマークした首位に立ち、決勝ラウンドではただ一人2日間60台をマークする安定したゴルフでツアー初優勝をメジャーで飾る快挙を達成、5年間のシード権を獲得した。メジ

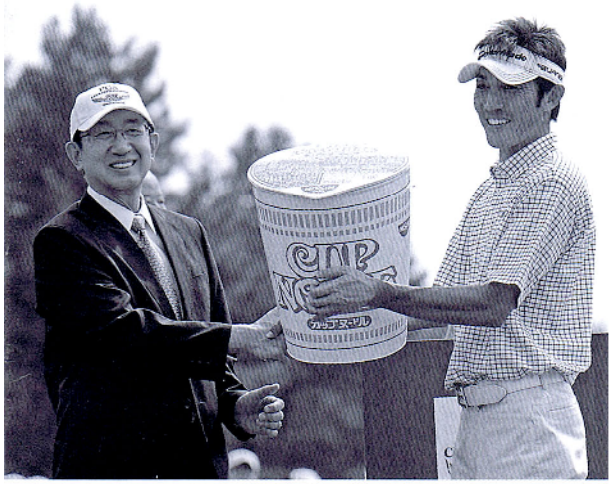
●賞金1千500万円をチャリティ

日本オープンを上回る日本最古の歴史をもつ日本プロゴルフ選手権大会。前年から日清食品ホールディングスが特別協賛する冠大会になり、舞台の兵庫県・小野東洋ゴルフ倶楽部は一層盛り上がった。賞金総額も昨年から1千万円増額し1億5千万円（優勝3千万円）となった。東日本大震災のチャリティ大会として行われ、賞金の10％（1千500万円）が被災地の復興支援のために寄付された。

●柔らかい砂のバンカー、517Yのパー4が話題に——プロアマ大会

火曜日の5月10日はあいにく激しい雨となったプロアマ大会。それでも石川遼はじめ主力選手はスポンサーのお歴々と笑顔で18ホールを楽しんだ。後ろ髪を濡らしながらこのコース、初ラウンドした石川遼は相変わらずの人気者だったが、柔らかいバンカーにさっそく要注意信号。「5番ウッドで打った第2打が目玉になったし、バウンドして入ったボールでも、柔らかい川砂で目玉になりやすい」と警戒。大会用に2個増やし計102個あるバンカーの回避作戦をとると宣言した。

尚、プロアマ大会はディフェンディングチャンピオンの谷口徹組が優勝し、同組の日清食品ホールディングス安藤宏基CEOとPGA松井功会長は大会2連覇となった。



ャーでの初Vは史上15人目。

河井は「ゴルフをやめようかと思ったこともあったが、やめなくてよかった」と号泣。日清食品ホールディングスの協賛を得て冠大会となって2年目の大会は、39歳6カ月と2日のベテランがゴルフ人生をかけたドラマチックなストーリーで盛り上げた。

▼第1日

雨、微風。15番パー5を517ヤードのパー4に設定、パーも71と難易度を高めたがグリーンが止まりやすく好スコアが続出した。アンダーパーは31人。

韓国のJ・チョイ、金亨成が5アンダー66で首位に立った。1打遅れの68に藤田寛之、松村道央、宮瀬博文が続いた。

注目の日清所属のホストプロ、池田勇太は1アンダー21位と2年ぶり2度目の優勝を目指し好スタート。注目の石川遼はパットに苦しみ1バーディー、1ボギーのイーブンパー71で37位。2連覇を目指す谷口亨、河井博大は37位。

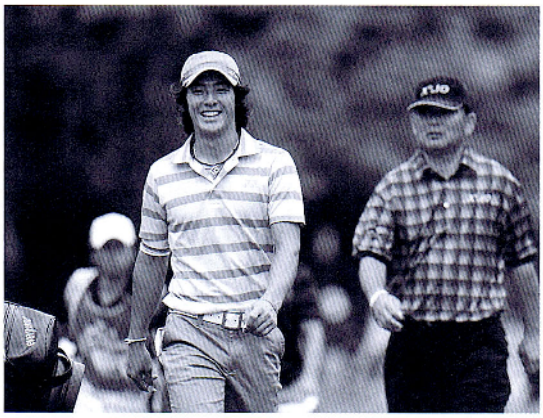
▼第2日

晴れ、強風。河井は2、3番とロングパットを沈め流れに乗った。好調なパットに支えられ10、14番ではピン80センチにつけるバーディーで6バーディー2ボギー67の

●石川遼“４度目の正直”で日本プロ初の予選通過

日本プロは毎年開催コースが変わる大会。全国各地域のファンと地域密着型のメジャーだが、石川遼はプロ転向後、３年連続で予選落ちしていた。「ゴルフも考え方も、去年の石川遼とは違っている」と、自ら進化をほのめかしていた通り、今回は４回目の挑戦で初めて予選を突破した。２日間とも７１のイーブンパーで２６位。それでも２日目、３番でボギー先行。４番はバンカーで目玉になるなど５オン１パットのダブルボギー。「今年もダメかと思ったけど、１打１打に集中するしかないと開き直った」と、バックナインは難しいホールをパーで凌ぎ、１１番、１８番でバーディーを奪って「耐えました」と、安堵の表情。「優勝したあとのような慎重さでスコアカードに署名しました」とおどけてみせた。

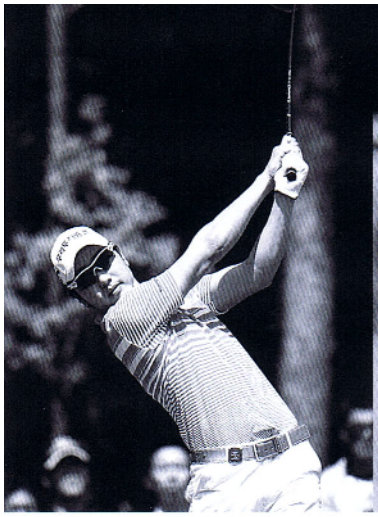
決勝ラウンドの２日間、石川遼がいるかいないかでは観客動員も目に見えて違う。今大会は、３日目も６千３３４人、最終日は８千７６５人で４日間累計で２万１１３人のギャラリーが集まった。石川遼は、３日目に１０番から自己ワーストに並ぶ４連続ボギーなどで７４と崩れたが、最終日に初めてアンダーパーの７０。２６位から１２位に上がって“４度目の正直”はフィニッシュ。「パターのタッチと、グリーンのスピードが最後まで合わなかった。でも、ひとつでもいい順位であがろうというプレーはできた。優勝できる準備は整ったと思う」と、キッパリ。この試合から使ったマッスルバックのアイアンも継続して使用していくことを決めた。



ベストスコアで首位タイへ。松村が71、J・チョイ72で3人が首位に並んだ。

ディフェンディングチャンピオンの谷口が69、通算2アンダー8位へ。1アンダーの16位には池田、片山晋呉も上がった。コースが固くしまりはじめ、風も吹き第1ラウンド31人だったアンダーパーは25人に減った。

石川は2日連続の71、イーブンパー26位と大会出場4年目で初の予選突破を果たした。ワンパットパーが8回と忍耐のゴルフだった。



ベ・サンムン

松村　道央

▼第3日

河井はバーディー先行のよい流れから4バーディー2ボギー69、6アンダーと首位を守った。韓国のベ・サンムン（襄相文）が66のコースレコードタイで16位から首位に並んだ。松村が1打差の単独3位、3打差の単独4位にJ・チョイ。2アンダー首位から4打差に池田、金庚泰、武藤俊憲がつけ優勝争いは混とん。

石川は10番から4連続ボギーをたたくなど74とスコアを落とし26位。首位から9打差となり19歳7カ月のメジャー最年少優勝記録（従来の記録は浅見禄蔵の19歳9ケ月）の更新は絶望的となった。

首位と2打差8位からスタートの谷口は1番ホール終了後、腰痛のため棄権するアクシデントとなった。

▼最終日

河井、ベ・サンムン、松村の最終組から河井とベ・サンムンが8アンダーで並んで優勝争いは激烈。河井は13番で3メートルのパットを決め9アンダーとリードするも、14番でエッジからパターを使ったアプローチを寄せきれずボギー。勝負は17番、再びグリーン手前エッジからのアプローチが優勝へのターニングポイントとなった。河井は見事カップインさせるバーディーでトップに抜け出した。

「距離は15ヤード。迷わずパターで打った。これが僕のゴルフスタイル、ゴルフを始めて以来、ずっとやってきたスタイルを貫いたのが勝因」とのちに語る会心の1打だった。河井は18番、プレッシャーのかかったティーショットも強い気持ちでクリアしパー。通算9アンダー、2位の襄相文（ベ・サンムン）が最終ホールをボギーとし2打差がついた。

3位は5打差で松村、金庚泰。5位は池田とマークセン、石川は2オーバーの12位で大会4年目にして初めて賞金を手にした。

●ホストプロ池田勇太、モンスターNo.15で唯一バーディ(3R)も5位止まり

池田勇太にとって日本プロは切っても切れない縁がある。プロ３年目の２００９年は、７打差のぶっちぎりでプロ初優勝を遂げた試合。これが縁で日清食品と所属契約を結ぶことができた。ホストプロとしての今大会だが、今年の池田はいまひとつ本来の調子が出ない。初日２１位、２日目１６位、３日目には最難関の１５番（５１７ヤード、パー４）で逆風を突いて２打目３Ｗで見事２オン。１３メートルのバーディーパットを沈めて、ただ一人のバーディーを奪ったのがせめてもの見せ場。最終日はまた７２と後退したが、トータルでは１アンダーで５位タイに食い下がってホッ。

「運にも見放された厳しい試合だったけど、トップ５で上がれてよかった。優勝争いはできているから早く今年も勝ちたい」と、前年の９位タイよりは順位を上げたものの、ちょっぴり悔しいコメント。